

This Page Is Inserted by IFW Operations  
and is not a part of the Official Record

## **BEST AVAILABLE IMAGES**

Defective images within this document are accurate representations of the original documents submitted by the applicant.

Defects in the images may include (but are not limited to):

- BLACK BORDERS
- TEXT CUT OFF AT TOP, BOTTOM OR SIDES
- FADED TEXT
- ILLEGIBLE TEXT
- SKEWED/SLANTED IMAGES
- COLORED PHOTOS
- BLACK OR VERY BLACK AND WHITE DARK PHOTOS
- GRAY SCALE DOCUMENTS

**IMAGES ARE BEST AVAILABLE COPY.**

**As rescanning documents *will not* correct images,  
please do not report the images to the  
Image Problem Mailbox.**

# EUROPEAN PATENT OFFICE

## Patent Abstracts of Japan

PUBLICATION NUMBER : 2000123867  
PUBLICATION DATE : 28-04-00

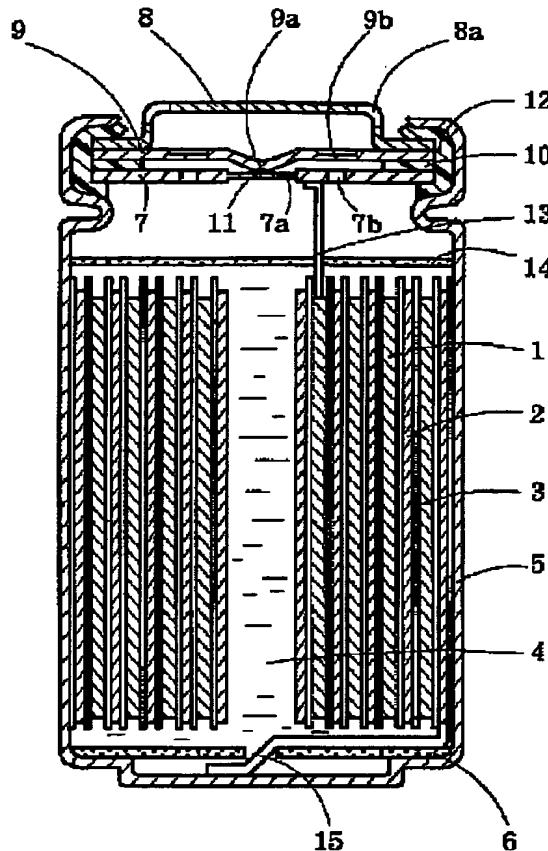
APPLICATION DATE : 20-10-98  
APPLICATION NUMBER : 10297465

APPLICANT : UBE IND LTD;

INVENTOR : HAMAMOTO SHUNICHI;

INT.CL. : H01M 10/40 H01M 4/02

TITLE : NONAQUEOUS SECONDARY BATTERY



ABSTRACT : PROBLEM TO BE SOLVED: To provide a nonaqueous secondary battery with high capacity and high cycle characteristics.

SOLUTION: A nonaqueous secondary battery has a positive electrode 1, a negative electrode 2, and an electrolyte 4, a 4-V class active material is used in the positive electrode 1, discharge capacity per unit volume of an electrode laminate is 130 mAh/cm<sup>3</sup> or more, and cyclic ester having C=C unsaturated bond within the ring or its derivative is contained in the electrolyte 4. As the cyclic ester having C=C unsaturated bond within the ring or its derivative, for example, vinylene carbonate, quoumarin, catechol carbonate, phthalide, an alkyl group substituted vinylene carbonate, or an alkyl group substituted catechol carbonate is preferable, and its content is preferable to be 0.05-8 wt.% based on the weight of the solvent component in the electrolyte.

COPYRIGHT: (C)2000,JPO

(19)日本国特許庁 (JP)

(12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開2000-123867

(P2000-123867A)

(43)公開日 平成12年4月28日 (2000.4.28)

(51)Int.Cl.<sup>7</sup>  
H 01 M 10/40  
4/02

識別記号

F I  
H 01 M 10/40  
4/02

テーマコード(参考)  
A 5 H 0 2 9  
D

審査請求 未請求 請求項の数3 O.L (全 8 頁)

(21)出願番号

特願平10-297465

(22)出願日

平成10年10月20日 (1998.10.20)

(71)出願人 000005810

日立マクセル株式会社

大阪府茨木市丑寅1丁目1番88号

(71)出願人 000000206

宇部興産株式会社

山口県宇部市西本町1丁目12番32号

(72)発明者 喜多 房次

大阪府茨木市丑寅一丁目1番88号 日立マ  
クセル株式会社内

(74)代理人 100078064

弁理士 三輪 鐘雄

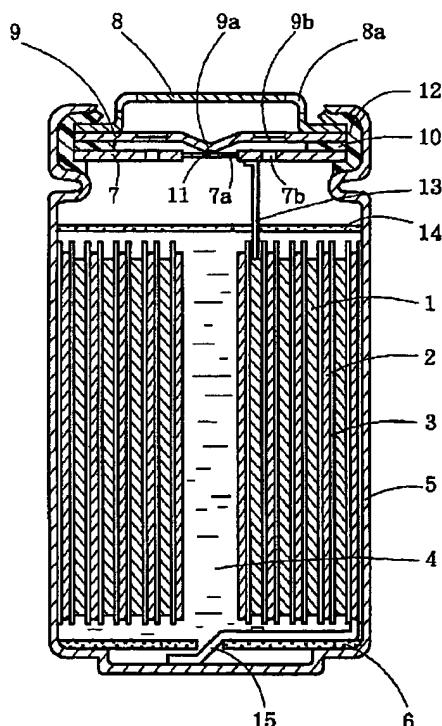
最終頁に続く

(54)【発明の名称】 非水二次電池

(57)【要約】

【課題】 高容量で、かつサイクル特性が優れた非水二  
次電池を提供する。

【解決手段】 正極、負極および電解質を有し、正極に  
4V級の活物質を用い、電極積層体の単位体積当たりの  
放電容量が130 mAh/cm<sup>3</sup>以上 の非水二次電池において、上記電解質中に環状で環内にC=C不飽和結合  
を有するエステルまたはその誘導体を含有させる。環状  
で環内にC=C不飽和結合を有するエステルまたはその  
誘導体としては、例えば、ビニレンカーボネート、クマ  
リン、カテコールカーボネート、フタライド、アルキル  
基置換ビニレンカーボネート、アルキル基置換カテコ  
ールカーボネートなどが好ましく、その含有量としては電  
解質の溶媒成分中0.05~8重量%が好ましい。



## 【特許請求の範囲】

【請求項1】 正極、負極および電解質を有し、正極に4V級の活物質を用い、電極積層体の単位体積当たりの放電容量が $130\text{ mAh}/\text{cm}^3$ 以上の非水二次電池であって、上記電解質中に環状で環内にC=C不飽和結合を有するエステルまたはその誘導体を含有することを特徴とする非水二次電池。

【請求項2】 負極に炭素材料を用い、その負極の負極合剤層の密度が $1.45\text{ g}/\text{cm}^3$ 以上であり、かつ上記炭素材料の(002)面の面間距離 $d_{002}$ が $3.5\text{ \AA}$ 以下で、c軸方向の結晶子の大きさ $L_c$ が $30\text{ \AA}$ 以上である請求項1記載の非水二次電池。

【請求項3】 環状で環内にC=C不飽和結合を有するエステルまたはその誘導体の含有量が電解質の溶媒成分中0.05~8重量%である請求項1記載の非水二次電池。

## 【発明の詳細な説明】

## 【0001】

【発明の属する技術分野】本発明は、非水二次電池に関し、さらに詳しくは、高容量で、かつサイクル特性が優れた非水二次電池に関する。

## 【0002】

【従来の技術】リチウムイオン二次電池に代表される非水二次電池は、容量が大きく、かつ高電圧、高エネルギー密度、高出力であることから、ますます需要が増える傾向にある。

【0003】しかしながら、この非水二次電池について、本発明者らは、さらなる高性能化を目指して検討を進めていくうちに、電池の容量が増加するのに伴い、特に電極積層体の単位体積当たりの放電容量が $130\text{ mAh}/\text{cm}^3$ 以上の高容量になると、所望のサイクル特性が得られにくくなることが判明した。

## 【0004】

【発明が解決しようとする課題】本発明は、上記のような従来の非水二次電池の問題点を解決し、電極積層体の単位体積当たりの放電容量が $130\text{ mAh}/\text{cm}^3$ 以上の高容量の非水二次電池において、サイクル特性が優れた非水二次電池を提供することを目的とする。

## 【0005】

【課題を解決するための手段】本発明は、正極、負極および電解質を有し、正極に4V級の活物質を用い、電極積層体の単位体積当たりの放電容量が $130\text{ mAh}/\text{cm}^3$ 以上の非水二次電池において、電解質中に環状で環内にC=C不飽和結合を有するエステルまたはその誘導体を含有させることによって、上記課題を解決したものである。

## 【0006】

【発明の実施の形態】また、本発明においては、負極に炭素材料を用い、その負極の負極合剤層の密度が $1.45\text{ g}/\text{cm}^3$ 以上で、かつ上記炭素材料の(002)面

の面間距離 $d_{002}$ が $3.5\text{ \AA}$ 以下で、c軸方向の結晶子の大きさ $L_c$ が $30\text{ \AA}$ 以上である場合や、環状で環内にC=C不飽和結合を有するエステルまたはその誘導体の含有量が電解質の溶媒成分中0.05~8重量%であることを好ましい形態とする。

【0007】本発明において用いる環状で環内にC=C不飽和結合を有するエステルとしては、例えば、ビニレンカーポネート、クマリン、カテコールカーポネート、フタリドなどが挙げられ、その誘導体としては、例えば、アルキル基置換ビニレンカーポネート、アルキル基置換カテコールカーポネートなどが挙げられる。そして、上記環状のエステルまたはその誘導体の環内のC=C不飽和結合は共鳴構造でないことが好ましく、またカーポネート構造であることが好ましい。従って、環状で環内にC=C不飽和結合を有するエステルまたはその誘導体としては、特にビニレンカーポネートまたはその誘導体が好ましい。

【0008】上記環状で環内にC=C不飽和結合を有するエステルまたはその誘導体の電解質中の含有量は、電解質の溶媒成分中0.05重量%以上であることが好ましく、それによって、電池のサイクル特性を顕著に向上させることができ、より好ましくは0.1重量%以上、さらに好ましくは0.5重量%以上である。また、上記環状で環内にC=C不飽和結合を有するエステルまたはその誘導体の電解質中の含有量は、電解質の溶媒成分中8重量%以下であることが好ましく、それによって、電池の容量の低下を少なくすることができ、より好ましくは4重量%以下、さらに好ましくは2重量%以下、さらに好ましくは1重量%以下である。本発明において、環状で環内にC=C不飽和結合を有するエステルまたはその誘導体の電解質の溶媒成分中の含有量とは、電池を化成、エイジングした後、標準使用条件【1C(その電池を1時間で放電できる電流)で $25^\circ\text{C}$ で $4.2\text{ V}$ まで充電し、 $4.2\text{ V}$ に達した後は、定電圧充電を行い、充電を2時間半で終了し、 $0.2\text{ C}$ で $2.75\text{ V}$ まで放電する条件】で放電した後、電池内の電解質の溶媒成分をガスクロマトグラフィで分析することによって、測定した環状で環内にC=C不飽和結合を有するエステルまたはその誘導体が電解質の溶媒成分中において占める量である。

【0009】本発明において、電解質としては、液状電解質、ゲル状電解質、固体電解質のいずれであってもよいが、本発明においては、特に液状電解質を用いることが多いことから、以下、この液状電解質を当業者間で慣用されている「電解液」という表現を用い、それを中心に詳細に説明する。

【0010】本発明において、電解液の溶媒としてはエスセルが好適に用いられる。特に鎖状エスセルは、電解液の粘度を下げ、イオン伝導度を高めることから好適に用いられる。このような鎖状エスセルとしては、例え

ば、ジメチルカーボネート、ジエチルカーボネート、メチルエチルカーボネート、プロピオン酸メチルなどの鎖状のC=O-O-C結合を有する有機溶媒、リン酸トリメチルなどの鎖状リン酸トリエステルなどが挙げられ、それらの中でも特に鎖状のカーボネート類が好ましい。

【0011】また、上記鎖状エステルなどに下記の誘電率が高いエステル（誘電率30以上）を混合して用いると負荷特性などが向上するので好ましい。このような誘電率が高いエステルとしては、例えば、エチレンカーボネート（EC）、プロピレンカーボネート（PC）、ブチレンカーボネート（BC）、ガムマーブチロラクトン（γ-BL）、エチレングリコールサルファイト（EGS）などが挙げられる。特に環状構造のものが好ましく、とりわけ環状のカーボネートが好ましく、エチレンカーボネート（EC）が最も好ましい。

【0012】上記高誘電率エステルは電解液の全溶媒中の50体積%未満が好ましく、より好ましくは40体積%以下、さらに好ましくは35体積%以下である。そして、これらの誘電率に高いエステルによる特性の向上は、上記エステルが電解液の全溶媒中で10体積%以上になると顕著になり、20体積%に達するとより顕著になる。また、これと混合する鎖状エステルは、電解液の全溶媒中の50体積%以上が好ましく、より好ましくは60体積%以上、さらに好ましくは65%以上である。

【0013】上記エステル以外に併用可能な溶媒としては、例えば、1,2-ジメトキシエタン（DME）、1,3-ジオキソラン（DO）、テトラヒドロフラン（THF）、2-メチル-1-テトラヒドロフラン（2Me-THF）、ジエチルエーテル（DEE）などが挙げられる。そのほか、アミン系またはイミド系有機溶媒や、含イオウ系または含フッ素系有機溶媒なども用いることができる。また、ポリエチレンオキサイドやポリメタクリル酸メチルなどのポリマーを含んでゲル状になっていてもよい。

【0014】電解液の溶質としては、例えば、LiClO<sub>4</sub>、LiPF<sub>6</sub>、LiBF<sub>4</sub>、LiAsF<sub>6</sub>、LiSbF<sub>6</sub>、LiCF<sub>3</sub>SO<sub>3</sub>、LiC<sub>4</sub>F<sub>9</sub>SO<sub>3</sub>、LiCF<sub>3</sub>CO<sub>2</sub>、Li<sub>2</sub>C<sub>2</sub>F<sub>4</sub>(SO<sub>3</sub>)<sub>2</sub>、LiN(CF<sub>3</sub>SO<sub>2</sub>)<sub>2</sub>、LiC(CF<sub>3</sub>SO<sub>2</sub>)<sub>3</sub>、LiC<sub>n</sub>F<sub>2n+1</sub>SO<sub>3</sub>(n≥2)、LiN(RfOSO<sub>2</sub>)<sub>2</sub>〔ここでRfはフルオロアルキル基〕などが単独でまたは2種以上混合して用いられるが、特にLiPF<sub>6</sub>やLiC<sub>4</sub>F<sub>9</sub>SO<sub>3</sub>などが好ましい。電解液中における溶質の濃度は、特に限定されるものではないが、濃度を1mol/l以上にすると安全性がよくなるので好ましい。1.2mol/l以上がより好ましい。また、1.7mol/lより少ないと電気特性が良くなるので好ましく、1.5mol/lより少ないとさらに好ましい。

【0015】本発明においては、環状で環内にC=C不

飽和結合を有するエステルまたはその誘導体の電解質中の含有量を、電解質の溶媒成分中において上記環状で環内にC=C不飽和結合を有するエステルまたはその誘導体が占める重量%で規定するが、上記溶媒成分はすべてが常温で液体のもので構成されていることを要しない。例えば、上記環状で環内にC=C不飽和結合を有するエステルまたはその誘導体中にはクマリンなどのように常温で固体のものもあるが、それを溶媒に溶かすと溶液になるので、本発明では、それを溶媒成分ということにする。言い換えると、電解質をリチウム塩でイオン伝導に直接関与する溶質とそれ以外のものとに分けた場合に溶質以外のものを溶媒成分という。

【0016】上記環状で環内にC=C不飽和結合を有するエステルまたはその誘導体を含有する電解液の調製は、例えば、溶媒と上記環状で環内にC=C不飽和結合を有するエステルまたはその誘導体を混合し、そこに溶質を溶解させればよい。

【0017】本発明において、正極に4V級の活物質を用いるのは、高エネルギー密度の電池が得られやすいという理由によるものであり、このような4V級の活物質としては、例えば、LiCoO<sub>2</sub>、LiNiO<sub>2</sub>、LiMn<sub>2</sub>O<sub>4</sub>、または、それらを主成分とする活物質、例えばLiNi<sub>0.7</sub>Co<sub>0.3</sub>O<sub>2</sub>などが挙げられる。

【0018】正極は、例えば、上記正極活物質に、必要に応じて、例えば鱗片状黒鉛などの導電助剤やポリフィ化ビニリデン、ポリテトラフルオロエチレンなどのバインダを加え、混合して正極合剤を調製し、それを溶剤で分散させてペーストにし（バインダはあらかじめ溶剤に溶解させてから正極活物質などと混合してもよい）、その正極合剤ペーストを金属箔などからなる正極集電材に塗布し、乾燥して、正極集電材の少なくとも一部に正極合剤層を形成することによって作製される。ただし、正極の作製方法は、上記例示の方法に限られることなく、他の方法によってもよい。

【0019】正極に用いる正極集電材は、アルミニウムを主成分とする金属箔が好ましく、その純度は98重量%以上99.9重量%未満が好ましい。通常のリチウムイオン二次電池では純度が99.9重量%以上のアルミニウム箔が正極集電材として用いられているが、本発明においては高容量化やサイクル特性の向上を図るため厚さが1.5μm以下の薄い金属箔を用いるのが好ましい。そのため、薄くても使用に耐え得る強度にしておくことが好ましく、そのような強度を確保するためには純度が99.9重量%未満であることが好ましい。アルミニウムに添加する金属として特に好ましいのは、鉄とシリコンである。鉄は0.5重量%以上が好ましく、さらに好ましくは0.7重量%以上であり、また、2重量%以下が好ましく、より好ましくは1.3重量%以下である。シリコンは0.1重量%以上が好ましく、より好ましくは0.2重量%以上であり、また1.0重量%以下が好

ましく、より好ましくは0.3重量%以下である。これらの鉄やシリコンはアルミニウムと合金化していることが必要であり、アルミニウム中に不純物として存在するものではない。

【0020】そして、正極集電材の引張り強度としては $150\text{ N/mm}^2$ 以上が好ましく、より好ましくは $180\text{ N/mm}^2$ 以上である。また、本発明において用いる正極集電材は、伸びが2%以上であることが好ましく、より好ましくは3%以上である。これは電極積層体の単位体積当たりの放電容量が大きくなるにつれて電極合剤層の充電時の膨張が大きくなるため、その膨張によって正極集電材に応力が発生し、それによって、正極集電材に亀裂や切断などが発生しやすくなるが、正極集電材の伸びを大きくしておくと、その伸びによって応力を緩和し、正極集電材の亀裂や切断などを防止できるようになるからである。

【0021】本発明においては、上記のように、正極集電材として厚みが $15\mu\text{m}$ 以下のアルミニウムを主成分とする金属箔を用いることが好ましいとしているが、これは厚みが薄いほど電池の高容量化に好都合であるという理由によるものである。しかし、あまりにも薄くなりすぎると、製造時に正極集電材の強度不足による切断などが生じるおそれがあるため、正極集電材の厚みとしては、上記のように $15\mu\text{m}$ 以下であって、 $5\mu\text{m}$ 以上、特に $8\mu\text{m}$ 以上が実用上適している。

【0022】また、正極集電材の表面は片面が粗面化していることが好ましい。そして、その粗な面が巻回体において外周側の面にあることが好ましい。これは、巻回体の場合、外周側の面が巻回中心部に近くなるほど対向する負極が多く存在しているので正極が劣化しやすいため、外周側に粗な面を用いて接着性を高めることにより正極の劣化を低減できるからである。粗な面の好ましい平均粗度はRaで $0.1\sim0.5\mu\text{m}$ であり、より好ましくは $0.2\sim0.3\mu\text{m}$ である。そして、光沢面の好ましい平均粗度はRaで $0.2\mu\text{m}$ 以下で、より好ましくは $0.1\mu\text{m}$ 以下である。

【0023】また、正極集電材の濡れ性が悪い場合、電池をサイクル（充放電）させた場合にサイクル特性の低下が生じやすい傾向にある。そのような場合には正極集電材の濡れ性を $37\text{ dyne/cm}$ 以上にすることが好ましい。

【0024】負極に用いる材料は、リチウムイオンをドープ、脱ドープできるものであればよく、本発明においては、それを負極活物質と呼んでいるが、そのような負極活物質の具体例としては、例えば、黒鉛、熱分解炭素類、コークス類、ガラス状炭素類、有機高分子化合物の焼成体、メソカーボンマイクロビーズ、炭素繊維、活性炭などの炭素材料が挙げられる。特に $2500^\circ\text{C}$ 以上で焼成したメソカーボンマイクロビーズは、負極合剤層を高密度に作製してもサイクル特性が良好であることから

好ましい。また、Si、Sn、Inなどの合金あるいはLiに近い低電圧で充放電できる酸化物などの化合物なども負極活物質として用いることができる。

【0025】負極活物質として炭素材料を用いる場合、該炭素材料は下記の特性を持つものが好ましい。すなわち、その(002)面の面間距離 $d_{002}$ に関しては、 $3.5\text{ \AA}$ 以下が好ましく、より好ましくは $3.45\text{ \AA}$ 以下、さらに好ましくは $3.4\text{ \AA}$ 以下である。またc軸方向の結晶子の大きさ $L_c$ は $30\text{ \AA}$ 以上が好ましく、より好ましくは $80\text{ \AA}$ 以上、さらに好ましくは $250\text{ \AA}$ 以上である。そして、上記炭素材料の平均粒径は $8\sim20\mu\text{m}$ 、特に $10\sim15\mu\text{m}$ が好ましく、純度は99.9重量%以上が好ましい。

【0026】負極は、例えば、上記負極活物質に、必要に応じ、正極の場合と同様の導電助剤やバインダなどを加え、混合して負極合剤を調製し、それを溶剤に分散させてペーストにし（バインダはあらかじめ溶剤に溶解させておいてから負極活物質などと混合してもよい）、その負極合剤ペーストを銅箔などからなる負極集電材に塗布し、乾燥して、負極集電材の少なくとも一部に負極合剤層を形成することによって作製される。ただし、負極の作製方法は上記例示の方法に限られることなく、他の方法によてもよい。

【0027】上記負極集電材としては、例えば、銅箔、アルミニウム箔、ニッケル箔、ステンレス鋼箔などの金属箔や、それらの金属を網状にしたものなどが用いられるが、特に銅箔が適している。

【0028】負極に炭素材料を用いる場合は、その負極の負極合剤層の密度を $1.45\text{ g/cm}^3$ 以上にすることが高容量化を図る上で好ましく、より好ましくは $1.5\text{ g/cm}^3$ 以上である。通常、負極合剤層を高密度にすると、高容量は得られやすくなるが、電解液の浸透が遅くなり、また活物質の利用度も不均一になりやすいため、サイクル特性が低下しやすくなるが、本発明によれば、そのような場合にも、優れたサイクル特性が得られる。すなわち、本発明において用いる環状で環内にC=C不飽和結合を有するエステルまたはその誘導体は、上記のように負極合剤層を高密度にした場合にも、その効果を顕著に発現する。

【0029】セパレータとしては、特に限定されることはないと、例えば、厚みが $20\mu\text{m}$ 以下の微孔性ポリエチレンフィルム、微孔性ポリプロピレンフィルム、微孔性エチレン-プロピレンコポリマー、フィルムなどのポリオレフィン系セパレータは、薄くても充分な強度を有しているので、正極活物質や負極活物質などの充填量を高めることができるとともに熱伝導性が改善され、電池内部の発熱に対しても放熱を促進するので、本発明において好適に使用される。特に電極積層体と電池ケースとの間にセパレータが介在する場合は電極内部の熱を放熱する効果が大きい。

【0030】本発明は、電極積層体の単位体積当たりの放電容量が $130\text{ mAh}/\text{cm}^3$ 以上の中水二次電池を対象としているが、これは高容量化を図るという理由に基づいている。本発明において、電極積層体の体積とは、正極、負極およびセパレータを積層したものまたは正極、負極およびセパレータを巻回したものの電池内における嵩体積であって、後者のように巻回したものにあっては、巻回に際して使用した巻き軸に基づく巻回体中心部の透孔などは体積として含まない。要は正極、負極、セパレータが占める嵩体積を合計したものである。これら正極、負極、セパレータの3つの体積は電池の容量を決定する重要な因子であり、電池の大きさにかかわらず、電極積層体の単位体積当たりの放電容量（放電容量／電極積層体の体積）を計算することによって、電池の容量密度を比較することができる。また、ここでいう放電容量とは、電池を前記の標準使用条件で充放電させた場合の放電容量である。そして、より高容量化を図るという観点からは、電極積層体の単位体積当たりの放電容量は $140\text{ mAh}/\text{cm}^3$ 以上がより好ましく、 $150\text{ mAh}/\text{cm}^3$ 以上がさらに好ましい。

## 【0031】

【実施例】つぎに、実施例をあげて本発明をより具体的に説明する。ただし、本発明はそれらの実施例のみに限定されるものではない。

## 【0032】実施例1

メチルエチルカーボネートとエチレンカーボネートとビニレンカーボネートとを体積比 $65:33:2$ で混合し、この混合溶媒に $\text{LiPF}_6$ を $1.4\text{ mol/l}$ 溶解させて、組成が $1.4\text{ mol/l LiPF}_6/\text{EC:MEC:VC}$ ( $33:65:2$ 体積比)で示される電解液を調製した。

【0033】上記電解液における、ECはエチレンカーボネートの略称であり、MECはメチルエチルカーボネートの略称であり、VCはビニレンカーボネートの略称である。従って、上記電解液を示す $1.4\text{ mol/l LiPF}_6/\text{EC:MEC:VC}$ ( $33:65:2$ 体積比)は、メチルエチルカーボネート $65$ 体積%とエチレンカーボネート $33$ 体積%とビニレンカーボネート $2$ 体積%との混合溶媒に $\text{LiPF}_6$ を $1.4\text{ mol/l}$ 溶解相当を溶解させたものであることを示している。

【0034】上記とは別に、 $\text{LiCoO}_2$ に導電助剤として鱗片状黒鉛を重量比 $100:6$ で加えて混合し、この混合物と、ポリフッ化ビニリデンをN-メチルピロリドンに溶解させた溶液とを混合してペースト状にした。このポリフッ化ビニリデンの量は $\text{LiCoO}_2$ に対して重量比 $100:3.8$ ( $\text{LiCoO}_2$  100重量部に対してポリフッ化ビニリデン $3.8$ 重量部)であった。この正極合剤ペーストを $70\text{ メッシュ}$ の網を通過させて大きなものを取り除いた後、厚さ $15\mu\text{m}$ のアルミニウムを主成分とする金属箔からなる正極集電材の両面に塗布した。

布量が $24.6\text{ mg/cm}^2$ （ただし、乾燥後の正極合剤量）となるように均一に塗布し、乾燥して正極合剤層を形成し、その後、ローラープレス機により圧縮成形し、切断した後、リード体を溶接して、帯状の正極を作製した。

【0035】上記正極集電材として用いたアルミニウムを主成分とする金属箔は、鉄を $1$ 重量%、シリコンを $0.15$ 重量%含んでおり、アルミニウムの純度は $98$ 重量%以上であった。また、正極集電材として用いたアルミニウムを主成分とする金属箔の引張り強度は $185\text{ N/mm}^2$ であり、粗面の平均粗度 $R_a$ は $0.2\mu\text{m}$ で、光沢面の平均粗度 $R_a$ は $0.04\mu\text{m}$ であった。そして、上記正極集電材として用いたアルミニウムを主成分とする金属箔の漏れ性は $38\text{ dyne/cm}$ で、伸びは $3\%$ であった。

【0036】つぎに、メソカーボンマイクロビーズの黒鉛系炭素材料（ただし、（002）面の面間距離 $d_{002}$ が $3.37\text{ \AA}$ で、c軸方向の結晶子の大きさ $L_c$ が $950\text{ \AA}$ であり、平均粒径 $15\mu\text{m}$ 、純度 $99.9$ 重量%以上という特性を持つ黒鉛系炭素材料）を、ポリフッ化ビニリデンをN-メチルピロリドンに溶解させた溶液と混合してペーストにした。このポリフッ化ビニリデンの量は黒鉛系炭素材料に対して重量比 $92:8$ （黒鉛系炭素材料 $100$ 重量部に対してポリフッ化ビニリデン $8.7$ 重量部）であった。この負極合剤ペーストを $70\text{ メッシュ}$ の網を通過させて大きなものを取り除いた後、厚さ $10\mu\text{m}$ の帯状の銅箔からなる負極集電材の両面に塗布量が $12.0\text{ mg/cm}^2$ （ただし、乾燥後の負極合剤量）となるように均一に塗布し、乾燥して負極合剤層を形成し、その後、ローラープレス機により圧縮成形し、切断した後、リード体を溶接して、帯状の負極を作製した。なお、負極の負極合剤層の密度は $1.5\text{ g/cm}^3$ であった。

【0037】前記帯状の正極を厚さ $20\mu\text{m}$ の微孔性ポリエチレンフィルムを介して上記帯状の負極に重ね、渦巻状に巻回して渦巻状巻回構造の電極積層体とした。その際、アルミニウムを主成分とする金属箔からなる正極集電材の光沢面が内周側になるようにした。上記電極積層体の体積は $11.4\text{ cm}^3$ であった。その後、この電極積層体を外径 $18\text{ mm}$ の有底円筒状の電池ケース内に充填し、正極および負極のリード体の溶接を行った。

【0038】つぎに、上記電解液を電池ケース内に注入し、電解液がセパレータなどに充分に浸透した後、封口し、予備充電、エイジングを行い、図1の模式図に示すような構造の筒形の非水二次電池を作製した。この電池を前記標準使用条件で放電後、電池内の電解液成分をガスクロマトグラフィにより分析し、ビニレンカーボネートの電解液の溶媒成分中の含有量を調べたところ、 $0.79$ 重量%であった。

【0039】図1に示す電池について説明すると、1は

前記の正極で、2は前記の負極である。ただし、図1では、繁雑化を避けるため、正極1や負極2の作製にあたって使用された集電体などは図示していない。そして、これらの正極1と負極2はセパレータ3を介して渦巻状に巻回され、渦巻状電極積層体にして、上記の特定電解液からなる電解質4と共に電池ケース5内に収容されている。

【0040】電池ケース5は前記のようにステンレス鋼製で、その底部には上記渦巻状電極積層体の挿入に先立って、ポリプロピレンからなる絶縁体6が配置されている。封口板7は、アルミニウム製で円板状をしていて、その中央部に薄肉部7aを設け、かつ上記薄肉部7aの周囲に電池内圧を防爆弁9に作用させるための圧力導入口7bとしての孔が設けられている。そして、この薄肉部7aの上面に防爆弁9の突出部9aが溶接され、溶接部分11を構成している。なお、上記の封口板7に設けた薄肉部7aや防爆弁9の突出部9aなどは、図面上での理解がしやすいように、切断面のみを図示しており、切断面後方の輪郭線は図示を省略している。また、封口板7の薄肉部7aと防爆弁9の突出部9aの溶接部分11も、図面上での理解が容易なように、実際よりは誇張した状態に図示している。

【0041】端子板8は、圧延鋼製で表面にニッケルメッキが施され、周縁部が鍔状になった帽子状をしており、この端子板8にはガス排出口8aが設けられる。防爆弁9は、アルミニウム製で円板状をしており、その中央部には発電要素側（図1では、下側）に先端部を有する突出部9aが設けられ、かつ薄肉部9bが設けられ、上記突出部9aの下面が、前記したように、封口板7の薄肉部7aの上面に溶接され、溶接部分11を構成している。絶縁パッキング10は、ポリプロピレン製で環状をしており、封口板7の周縁部の上部に配置され、その上部に防爆弁9が配置していて、封口板7と防爆弁9とを絶縁するとともに、両者の間から液状の電解質が漏れないように両者の間隙を封止している。環状ガスケット12はポリプロピレン製で、リード体13はアルミニウム製で、前記封口板7と正極1とを接続し、渦巻状電極積層体の上部には絶縁体14が配置され、負極2と電池ケース5の底部とはニッケル製のリード体15で接続されている。

#### 【0042】実施例2

正極合剤ペーストの塗布量を $23.6\text{ mg/cm}^2$ （ただし、乾燥後の正極合剤量）とし、負極合剤ペーストの塗布量を $11.49\text{ mg/cm}^2$ （ただし、乾燥後の負極合剤量）とし、セパレータとして従来から汎用されている厚さ $20\mu\text{m}$ のアルミニウムを主成分とする箔を用いた。このアルミニウムを主成分とする箔には鉄が0.03重量%、シリコンが0.02重量%含まれており、純度は99.94重量%であった。引張り強度は $140\text{ N/mm}^2$ （ $15\mu\text{m}$ 換算値）であり、両面光沢面で平均粗度Raは $0.04\mu\text{m}$ であった。また、濡れ性は $36\text{ dyne/cm}$ で、伸びは3%であった。この正極集電材の両面に実施例1と同様の正極合剤ペーストの含有量を調べたところ、0.80重量%であった。

#### 【0043】実施例3

電解液の溶媒成分中におけるビニレンカーボネートの占める量を1体積%に減らし、そのぶんメチルエチルカーボネートを增量して66体積%にした以外は、実施例1と同様に筒形の非水二次電池を作製した。この実施例3の電池のビニレンカーボネートの電解液の溶媒成分中の含有量を実施例1と同様に測定したところ、0.1重量%であった。

#### 【0044】実施例4

電解液の溶媒成分中におけるビニレンカーボネートの占める量を5体積%に増やし、そのぶんメチルエチルカーボネートを減らして62体積%にした以外は、実施例1と同様に筒形の非水二次電池を作製した。この実施例4の電池のビニレンカーボネートの電解液の溶媒成分中の含有量を実施例1と同様に測定したところ、2.6重量%であった。

#### 【0045】実施例5

電解液の溶媒成分中におけるビニレンカーボネートの占める量を10体積%に増やし、そのぶんメチルエチルカーボネートを減らして57体積%にした以外は、実施例1と同様に筒形の非水二次電池を作製した。この実施例5の電池のビニレンカーボネートの電解液の溶媒成分中の含有量を実施例1と同様に測定したところ、7.7重量%であった。

#### 【0046】実施例6

ビニレンカーボネートの代わりにクマリンを用いた以外は、実施例1と同様に筒形の非水二次電池を作製した。この実施例6の電池のクマリンの電解液の溶媒成分中の含有量を実施例1と同様に測定したところ、1.2重量%であった。

#### 【0047】比較例1

ビニレンカーボネートを用いず、そのぶんメチルエチルカーボネートを增量した以外は、実施例1と同様に筒形の非水二次電池を作製した。

#### 【0048】比較例2

ビニレンカーボネートを用いず、そのぶんメチルエチルカーボネートを增量し、負極合剤量を減らして負極の負極合剤層の密度を $1.4\text{ g/cm}^3$ にした以外は、実施例1と同様に筒形の非水二次電池を作製した。

#### 【0049】比較例3

ビニレンカーボネートを用いず、そのぶんメチルエチルカーボネートを增量し、正極集電材として従来から汎用されている厚さ $20\mu\text{m}$ のアルミニウムを主成分とする箔を用いた。このアルミニウムを主成分とする箔には鉄が0.03重量%、シリコンが0.02重量%含まれており、純度は99.94重量%であった。引張り強度は $140\text{ N/mm}^2$ （ $15\mu\text{m}$ 換算値）であり、両面光沢面で平均粗度Raは $0.04\mu\text{m}$ であった。また、濡れ性は $36\text{ dyne/cm}$ で、伸びは3%であった。この正極集電材の両面に実施例1と同様の正極合剤ペースト

を塗布量が $23.9\text{ mg/cm}^2$ （ただし、乾燥後の正極合剤量）となるように均一に塗布し、乾燥して正極合剤層を形成し、その後、ローラプレス機により圧縮成形した後、切断し、リード体を溶接して、帯状の正極を作製した。また、負極は実施例1と同様の厚さ $10\mu\text{m}$ の銅箔からなる負極集電材の両面に実施例1と同様の負極合剤ペーストを塗布量が $11.0\text{ mg/cm}^2$ （ただし、乾燥後の負極合剤量）となるように塗布し、乾燥して負極合剤層を形成し、セパレータとして実施例2と同様に従来から汎用されている厚さ $25\mu\text{m}$ の微孔性ポリエチレンフィルムを用い、それら以外は実施例1と同様に筒形の非水二次電池を作製した。

## 【0050】比較例4

正極合剤ペーストの塗布量を $20.0\text{ mg/cm}^2$ （ただし、乾燥後の正極合剤量）とし、負極合剤ペーストの塗布量を $12.0\text{ mg/cm}^2$ （ただし、乾燥後の負極

合剤量）とし、それ以外は比較例3と同様に筒形の非水二次電池を作製した。

【0051】上記実施例1～6および比較例1～4の電池を、 $1700\text{ mA}$ （1C）で $2.75\text{ V}$ まで放電した後、 $1700\text{ mA}$ で充電し、 $4.2\text{ V}$ の定電圧に保つ条件で2時間半充電を行った。その後、電池を $1700\text{ mA}$ で $2.75\text{ V}$ まで放電する充放電を繰り返し、1サイクル目の放電容量および100サイクル目の放電容量を測定し、それに基づき、100サイクル目での1サイクル目に対する容量保持率〔（100サイクル目の放電容量）／（1サイクル目の放電容量）×100〕を求めた。その結果を電極積層体の単位体積当たりの放電容量、1サイクル目の放電容量および電極積層体の体積と共に表1に示す。

## 【0052】

【表1】

	電極積層体の単位体積当たりの放電容量（ $\text{mAh}/\text{cm}^3$ ）	1サイクル目の放電容量（ $\text{mAh}$ ）	100サイクル目での容量保持率（%）	電極積層体の体積（ $\text{cm}^3$ ）
実施例1	157	1789	94	11.4
実施例2	151	1717	94	11.4
実施例3	157	1788	90	11.4
実施例4	156	1783	93	11.4
実施例5	149	1700	91	11.4
実施例6	155	1765	91	11.4
比較例1	155	1770	78	11.4
比較例2	155	1765	70以下	11.4
比較例3	151	1720	70以下	11.4
比較例4	127	1457	94	11.5

【0053】表1に示すように、ビニレンカーボネットを用いなかつた比較例1～3の電池では、100サイクル目での容量保持率が78%以下にまで低下したのに対し、ビニレンカーボネットを用いた実施例1～5の電池やクマリンを用いた実施例6の電池は100サイクル目での容量保持率が91%以上であって、サイクル特性が優れていた。また、実施例1～6の電池は、放電容量が大きく、高容量であり、特に薄いセパレータを用いた実施例1、実施例3～4および実施例6の電池は放電容量が大きかった。なお、比較例4の電池は、100サイクル目での容量保持率が94%と高く、サイクル特性は優れていたが、容量が小さく、電極積層体の単位体積当たりの放電容量が $130\text{ mAh/cm}^3$ に満たなかった。

## 【0054】

【発明の効果】以上説明したように、本発明では、正極に4V級の活物質を用い、電極積層体単位体積当たりの放電容量が $130\text{ mAh/cm}^3$ 以上という高容量の非水二次電池において、サイクル特性の優れた非水二次電池を提供することができた。

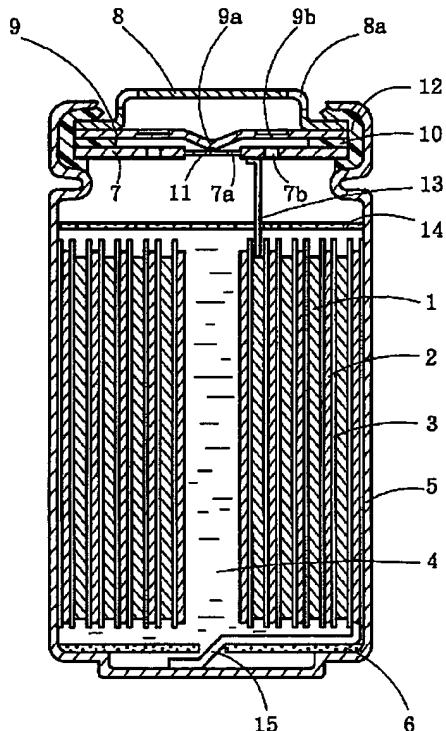
## 【図面の簡単な説明】

【図1】本発明の非水二次電池の一例を模式的に示す断面図である。

## 【符号の説明】

- 1 正極
- 2 負極
- 3 セパレータ
- 4 電解質

【図1】



---

フロントページの続き

(72)発明者 岩崎 美奈子  
大阪府茨木市丑寅一丁目1番88号 日立マ  
クセル株式会社内  
(72)発明者 石川 祐樹  
大阪府茨木市丑寅一丁目1番88号 日立マ  
クセル株式会社内  
(72)発明者 松本 和伸  
大阪府茨木市丑寅一丁目1番88号 日立マ  
クセル株式会社内

(72)発明者 安部 浩司  
山口県宇部市大字小串1978番地の5 宇部  
興産株式会社宇部研究所内  
(72)発明者 高井 勉  
山口県宇部市大字小串1978番地の5 宇部  
興産株式会社宇部研究所内  
(72)発明者 浜本 俊一  
山口県宇部市大字小串1978番地の5 宇部  
興産株式会社宇部研究所内

F ターム(参考) 5H029 AJ03 AJ05 AK03 AL06 AM01  
AM02 AM03 AM04 AM07 AM16  
BJ02 BJ14 HJ00 HJ01 HJ02  
HJ18 HJ19